鑑賞

作者の文壇デビュー作品でもある短編集「神様」のなかでも、「離さない」は異色である。同短編集に収められている他の作品も含め、「異界の者」とのコミットメントが共通のモチーフであるが、「離さない」における「異界の者」すなわち人魚とは、はっきりと決別する。いや、「人魚のすがたかたちも、人魚から離れたくないという気持ちも、はっきりとは思い出せなかった」とあるように、そもそも最初から人魚は存在したのだろうか。それくらい、人魚と「わたし」との距離は離れている。「神様」の「くま」をはじめとし、川上作品の多くは「異界の者」との接触を通しながら様々にその存在の性格を読み取ることができる。しかし「離さない」は、「分からない」ということに真正面から向き合った作品であろう。

物語は「旅先で妙なものを手に入れた」から始まる。人魚は「妙なもの」であって、それ以上でもなければそれ以下でもない。この冒頭の一文が、人魚を端的に表現している。その人魚を「手に入れた」のはエノモトさんである。エノモトさんは画家兼高校教師であり、しばしば旅をする。「異界の者」である人魚と出会うことができるのは、「境界／周縁の者」である。ところで、「異界の者」とは、まったく別世界のもの、想像も及ばぬ別次元の何かではない。人の世界に入り込み、言葉を操る時点で、「境界／周縁」性を持ち合わせている。人の世界の境界の者であるエノモトさんと、異界の境界の者である人魚が出会うのは必然であった。

そのエノモトさんと「わたし」は、同じ建物の上下の部屋をそれぞれの住居としている。数ある嗜好品にもれず、コーヒーも嗜好性が高い。エノモトさんがミルを引くところから淹れるコーヒーを「たいへんよろしきもの」と評する私は、コーヒーで緩やかにつながっている。嗜好性の共通こそが、秘密を共有する条件であろう。なぜエノモトさんは「わたし」に人魚の存在を明かしたのか。自分の執着を、それこそ強烈に魅了されているものを、誰彼構わずには打ち明けない。「異界の者」を共有する相手は、他でもない「わたし」なのである。

「神様」に登場する「異界の者」たちは、ファンタジーの住人ではない。あくまでも、現実の世界の存在として描かれる。人魚も同様に、エノモトさんと「わたし」の外見の描写がほとんどないこととは対照的に、その容姿や仕草、匂いまでもが詳細に、緻密に描写されている。「異界の者」と接触はしても決して馴れ合いはしない、一種の敬意の現れであろうか。

人魚への異様なほどの執着は、「どうやらそういうものらしい」。なぜ惹かれるのか、ではなく惹かれるものなのである。エノモトさんと「わたし」は人魚のそばを離れられなくなるが、どうして離れたくないのか、その理由は一切説明されない。「いにしえの昔から、人魚とはそういうものと決まっている」のである。その一方で、どのような執着なのか、その様子は克明に、グロテスクさを伴うリアリティで淡々と描写される。強すぎる執着は社会生活にまで影響を及ぼす。エノモトさんは、「自分はだめになってしまう」から、「わたし」に人魚を預かって欲しいと依頼した。だが、本当にそうなのだろうか。本当は、「わたし」に

も人魚を知って欲しかったからではないだろうか。コーヒーで緩やかにつながっていた二人は、人魚を媒体とした、いわば共犯者として強く結びついた。「わたし」が人魚にすっかり魅了され、外の世界への関心が薄れていた時も、「エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした」のである。

人魚への執着が一人で抱えきれるものではないことと同様に、その執着から離れることもまた、一人ではできない。最後の魔力を振り絞るように桜並木から花びらが散る、どことも知れぬ海岸は、あまりにも幻想的である。この幻想から逃れることができたのは、二人が新たに共有した「笑い」であった。

人魚には表情の描写がない。また、人魚に接するときの二人の表情や感情も描かれていない。人魚との関係性は、離すか離さないかであり、まさしく執着そのものなのである。その執着の主客が逆転したときに、執着することは魅了されることになる。執着する／魅了されることに、理由はない。なぜ離せないのか、なぜ離さないのか、その理由は最後まで明らかにならなかった。「分からないこと」ことの客体になること、あるいは「分からないこと」それ自体が、恐怖の正体である。

「異界の者」を理解するのは難しい。理解せずにただ受け入れることもまた難しい。二人は、「ずっと離さないでいるだけの強さ」がなかったと振り返るが、離そうとしないものから離れるためには、別の強さが必要である。人魚とは執着以外の関係性を持てなかった。それは、コミュニケーションの成立しない執着からなんとか逃げ出せたという、綺麗事ではすまない「異界の者」との接触の有り様である。「離さない」は、「分からない」ことを無理に分かろうとせず、けれども、どのように「分からない」のか、ということに誠実に向き合った二人の物語である。

最後に、人魚とのこの奇妙な出来事を描くためには、桜の存在が不可欠であろう。桜の咲きほこる美しさ、説明のつかない幻想性が、逆説的に人魚の存在に説得力を与える。この物語の三重性、すなわち、「わたし、エノモトさん／人魚」、「わたし／エノモトさん」、「人魚／桜」は、鮮やかに絡み合いながら、「離さない」の世界を描き出している。